一夏会報（いちげ）

No.67
平成29年11月1日
発行：鶴見大学
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3
TEL.045-574-8622・3（ダイヤルイン）
http://www.tsurumi-u.ac.jp

鶴見大学 学長
大山 喬史

先知・先哲から学ぶ 読書の楽しみ

「読十遍は、写一遍にしかず」、十回読むより一回書き写した方が、記憶に残り、活用できるということです。私は、三十年ほど前になりましょうか、論語から始まり、菜根譚、呻吟語など、人間学の書に読み耽るようになりました。心打たれた言葉を手書きでプリントし、学生に手渡し、十分程度ですが、講義に挟み込みました。その頃から、先知・先哲の箴言、新しい知識や素晴らしい表現は、必ずコンピュータのフォルダに書き留め、「ノート」作りをしています。ふと引用したい、確かめたいと思ったとき、直ぐに、元に戻れるからです。

最近は、床に就いても一時間は本を読んでおります。気になる箇所には必ず付箋を付け、翌日にはパソコンに書き移します。読めない漢字は、漢和辞典で調べ、フォルダ「漢字読み」にしまい込み、時には熟語、説文なども書き足します。知ること自体、楽しいことですが、活用できるようになれば、もっと楽しいからです。そこから、いろいろなことに気づき、自分の感性が育てられてゆくように思います。前任の東京医科歯科時代の著「論語から学ぶ・医療人の心得と姿勢」の小冊子は、この三年、佐藤一斎、安岡正篤、下村胡人、森信三などの名著から幾つもの言葉を拾い出しては書き足し、今では四万文字から九万文字になりました。兎に角、毎晩本を読むことは欠かしませんし、むしろそうした本を手にしないと眠りに就けません。先人の言葉を借り、自分の心情を、思考をその言葉に移し換えられれば、当に杜甫の詩を讃えた言葉、「鉄を点じて金と成す」安居を得た気分になります。

先日手にした本に、仏教語「諸法無我」「報恩」という言葉がありました。

「諸法無我」とは、「諸々の法（物事）には我はない」、すべての物事は繋がって存在しているのであって、独立した単体として存在するものはないという意味です。「報恩」とは、「仏、祖師、周りの人々から自らが受けた恩に報いる」ということで、つまり、「共に支え合って生かされているんだ」という解説が添えてありました。この種の書物に「生かされている」という表現がしばしば出てきますが、私としては「生きている」と書き換えたいところです。この世に生きているのは、受動的ではなく、ある意味では能動的に生きている積りでいるからです。それは、「報恩」という積極的な行動・実践が「生きる」上で、必須と思っているからです。

「花咲けば／共に眺めん／実熟せば／共に食べん／悲喜分かち／共に生きん」…（共に）

「このひとの／素直な支えによって／わたしもどうやら／曲がらずに生きてきた／もうしばらく支えてもらおう」…（支え）

何れも坂村真民の詩ですが、私欲の無い、素直な生き方が感じられます。

「共に活かし、共に生かされながら、共に生きていく」と、ある企業家の方が、大学と地域自治体との連携シナジーの基本、則ち協力、共同、協働がもたらす相乗効果について述べていました。「相手が存在して、自分が存在する」、これが、当に「共生」であり、おのずと周囲に対して謙虚な姿勢や優しい思い遣りの気持ちが湧いてくるはずです。「自分が存在して、相手がいる」と考えるとその思いは傲慢になりかねない。世の中とは、彼がいるからこその自分、そういう自分がいられることに感謝する、持ちつ持たれつのはずです。「唇亡歯寒」、まさに唇と歯との関係は、決して変わる事のない人社会の本質を語っているものと思います。

妖精の街 ヴロツワフの図書館

鶴見大学司書・司書補講習
主任教授
角田 裕之

司書・司書補講習の講習生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年の講習期間は、冷夏となり天候不順の日が続きました。体調管理にも気を使われた方が多かったのではないでしょうか。皆様が本一夏会報を手に取られている頃は、いくぶん過ごし易くなっていることと思います。

さて、司書資格を取得するには、必修が十一科目で二二単位、選択が二科目で二単位、合わせて二三科目で二四単位を取得する必要があります。大学や短期大学で司書資格を取得する場合には、四年間あるいは二年間に渡り段階的に学習します。ところが、司書講習で取得するには、段階的学習を僅か二箇月間で修了しなくてはなりません。よって、授業時間割も午前九時に始まる一時限から午後四時十分に終わる四時限まで、あるいは、午後五時五十分に終わる五時限まで続くことがありました。本講習を修了するには、盛大な学習意欲、強靭な精神力と体力が必要とされます。講習を無事に受講できたのは、講習生ご自身の努力はもちろんですが、ご家族のご理解やご協力、講習生同士の励まし合いも大きな支えとなったことでしょう。

本講習は、六十年を超えて開講され、継続する講習のなかで、最も歴史と伝統があります。本学が刊行した『鶴見大学司書・司書補講習六十周年記念誌』のなかで、元主任教授の岡田靖先生の「日本の司書養成と鶴見大学司書・司書補講習」と、前主任教授の原田智子先生の「鶴見大学司書・司書補講習の六十年間の歩みと将来展望」が、開講するまでの歴史を解説しています。また、担当講師や修了生の思い出も掲載されており、本講習が多くの有能な図書館学の教育者や図書館員を社会に送り出したことが良く分かります。

さて、ここからは、世界の図書館活動の事例とその都市の素敵な住人をご紹介したいと思います。今年の夏、国際図書館連(IFLA)のサテライト会議での研究成果発表と本会議に参加するために、ポーランドのグダニスクとヴロツワフを訪れました。サテライトは、八月十六日と十七日、本会議は八月十九日から二五日まで開催され、百二十か国から三千五百人にものぼる図書館員や大学教員の参加がありました。本講習からも五人の講師の先生が参加されていました。会議は分科会ごとに活発な討議がありました。

会議の期間中に幾つかの図書館等を見学できましたのでご紹介します。一つ目は、ヴロツワフ公共図書館(Miejska Biblioteka Publiczna we Wrocławiu)で、市内を中心に三十六館があります。訪問したメディア図書館(Mediateka)は、主に音楽や映像のメディアを所蔵しています。児童の遊具やゲーム等、ポーランド語で翻訳出版された日本のコミックも沢山ありました。平日でも多くの市民が利用していました。二つ目は、ヴロツワフ工科大学図書館(Biblioteka Politechniki Wrocławskiej)です。2013年に完成した新図書館では、著作権保護期間対象外の資料のデジタル化を進め、様々な図書がコンピュータから閲覧できます。また、視覚障碍者の資料利用のため点字図書を積極的に作成していました。三つ目は、オソリネウム図書館(Osslineum)です。1817年にウクライナのリヴィウに創設され、1946年にポーランドのヴロツワフに移転されました。ポーランドの貴重な図書を所蔵しています。同国の代表的詩人アダム・ミツキェヴィチのパン・タデウシュ物語(Pan Tadeusz)、レンブラントの版画等の学術的に重要な資料があります。同館は研究者や専門家など限られた利用者むけのレフェレンス図書館とし運営されています。

また、ヴロツワフは妖精(Wrocławskie krasnoludki)がいる都市としても有名です。メディア図書館の読書する妖精、子供図書館の自由の女神の妖精等々現在、317の妖精と市内のあらゆるところで出会えます。

最後になりましたが、講習生の皆様が、図書館や図書等に係る仕事に就かれ、さらにご活躍されますことを期待しております。

メディア図書館

オソリネウム図書館

ヴロツワフ工科大学図書館[資料のデジタル化]

妖精(自由の女神)子供図書館前にて

「利用するための保存」を考える

鶴見大学 教授
石田 千尋

司書・司書補講習を受講された皆さん、夏の二ヶ月間ご苦労様でした。今年の夏は天候も不順で、体調を維持しながら毎日数時間に及ぶ集中講義や試験・レポート作成など大変なことだったと思います。私は、司書講習で図書館情報資源特論（人文科学）を三時間担当させて頂きました。タイトでハードな時間割にもかかわらず、受講生の皆さんの熱心な態度にはこちらが学ばせて頂きました。休み時間には、こちらが用意した参考文献や史料を沢山の方々が閲覧され数多くの質問を頂いたことは、講義をする身にとって喜びでした。

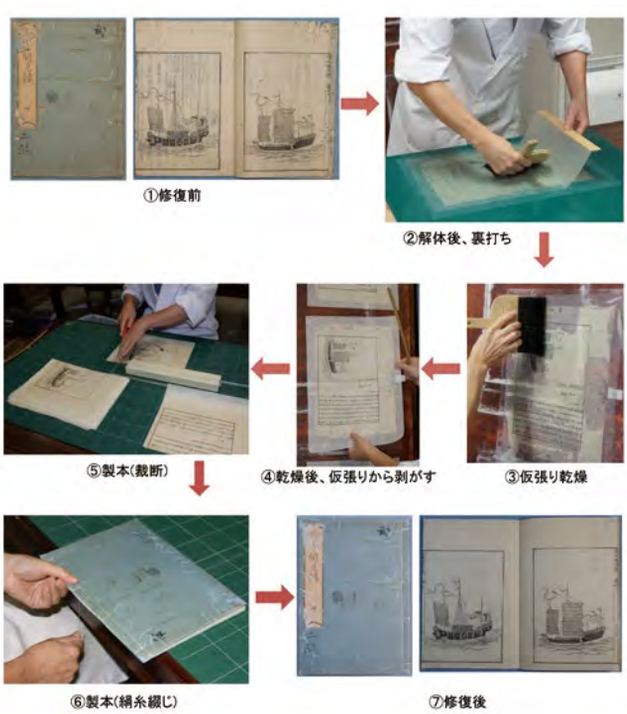
わずか三時間で講義名にかなう内容をどれだけお伝えできるのか、以前から疑問ではありましたが、最近は、古文書（特に近世文書）の調査・整理・保存について、なるべく経験談を交えてお話しするようにしています。将来、皆さんが図書館にお勤めになられた時に、直接、近世文書を担当される方は少ないでしょう。しかし、地域資料や郷土資料などを扱う際、また、個人の蔵書を受け入れ、整理・保管される際などの対応に必要な考え方は含まれていたのではないかと思っています。

今年の講義では、最後に史料の公開について少しだけふれさせてもらいました。史料を大切に保存し後世に伝えることは、その史料を所蔵・管理する者にとっての義務です。永久に散逸・変質・亡失は防止しなければなりません。しかし、その一方で利用者に便宜を与えるかたちでの保存でなければなりません。すなわち、「利用するための保存」です。史料にとっては、誰にも見せず、外気にも触れさせず、温湿度調節の効いた貴重書室の奥深くにそっと仕舞い込んでおくことの方が良いのです。しかし、それは正に「死蔵」です。もちろん、劣化・損傷の甚だしい史料を一般書と同じように閲覧に供せよということではありません。劣化・損傷している史料については、必要に応じて補修を加えた上で対応を考えなければならないことは当たり前のことです。

「利用するための保存」と公開を考える上で、近年のデジタル・アーカイブの進展には目を見張るものがあります。閲覧手続きが難しく、また一回の閲覧点数が限られている昨今、各機関がパソコン上に公開されているデジタル・アーカイブの史料の数々には唯々感嘆するばかりです。学生時代に一眼レフカメラと三脚、モノクロフィルム数十本をカバンに詰めて、各地の図書館・博物館・史料館で撮影させて頂いた史料が、自宅にいながらにして高精細カラー画像で拝見できることは大変有難いことです。各機関も貴重な史料は閲覧回数を極力減らしたいと望まれます。それは劣化・損傷の一原因にもなるわけですから致し方ないことだと思われます。そういった中でのデジタル・アーカイブによる史料公開は所蔵者・閲覧者、両者にとって都合の良いことだといえます。

しかし、一方で私達はデジタル・アーカイブの限界も了解しておかなければなりません。史料内容を読み取る上では、画面上でも良いのですが、原物でなければ分からない問題は多々あります。紙質・装幀・形状・折れ・染み等々、史料が教えてくれるそれらの情報は実見しなければ得られません。原物の持つ力強さは己が眼で確認しない限り伝わってきません。

将来、皆さんが図書館にお勤めになられた時、史料ばかりでなく図書館が所蔵するあらゆる資料を含めて「利用するための保存」を色々考えて頂けたらと願っています。



「長崎聞見録」の修復過程　劣化・損傷の甚だしい史料は、必要に応じて補修を加えたいものです。上記のものは、文化財学科で補修を加えた時のものです。

『図書（本）』の《顔》と《ハンドリング》のことなど

神奈川大学国際経営研究所
客員研究員
吉田 隆

僕は、図書館員の仕事は、図書館情報資源の組織化に始まり、組織化で終わると考えています。利用者サービスに重きをおいた図書館員の仕事は、次のようなプロセスがあります。①情報資源（情報）の選択（選書：図書館の経営を決定づける側面）・収集→②情報資源の加工（組織化ほか）→③情報資源の蓄積→④情報資源の検索→⑤情報資源の利用を可能ならしめるプロセスです。このプロセス（「ドキュメンテーションのプロセス」については原田智子先生のご教示）に「情報資源の組織化」が密接に関係すると。

プロセス①から⑤はフレキシブルで、より良い利用者サービスを提供するために⑤から①へと戻ることも必要です。こう捉えると、「直接サービス」であれ「間接サービス」であれ、講習での履修科目は必然的にこのプロセス＝「ドキュメンテーション」に関わり、各々の職域で密接に関わっています。「書名は？著者名は？主題は？などなど」こう考えていくと、情報資源の組織化は、レファレンスサービスにとっても重要で「記述目録法」（『日本目録規則87年版』、『英米目録規則第2版』）と「主題目録法」（『基本件名標目表』、『日本十進分類法新訂10版』）を学び、諸規則を理解するのはそのためです。また組織化をおこなうには当該資料から必要な情報を判読しなければなりませんから物としての本を判読する知識も必要です。皆さんは、どのように本をイメージし、どれくらい各名称を思い浮かべることができますか。こう切りだすのは、司書・司書補の皆さんが、和・洋の図書の《顔》についての情報を知りえていれば、図書館業務にも役立つからです。

本の顔

紙媒体の情報資源を、その物的な側面からお話してみると、①表紙（cover）、②耳（joint：本の中身と表紙の接合部）、③背（back spine）、④天（top edge）、⑤地（lower edge）、⑥ジャケット（jacket）、⑦帯（wrapper）、⑧見返紙（lining paper：本の表紙の前後に貼る紙）、⑨遊び紙（fly leaf：見返し紙と本文との間に付ける白紙）、⑩標題紙（title page：書名、著者名他の情報）、⑪標題紙裏（verso of title page）、⑫小口（fore edge：背を除いた三方の紙の切り口）、⑬奥付（colophon：和資料の情報の宝庫）、⑭栞（しおり）（bookmark）、⑮花布（はなぎれ）（headband：背の上下両端に張り付けた補強用の飾り布）という各名称からなっています。これら各名称には、タイトルと責任表示から始まって注記、そして主題付与に至るまで、組織化にとって必要な情報が含まれています。ゆっくり覚えてみたらいかがでしょうか。

ハンドリング

球技にボールのハンドリングがあるように本にもハンドリングがあります。

木部徹訳「一般蔵書のハンドリングについて」（米国議会図書館ナショナル・プリザベーション・プログラム室 National Preservation Program Office Washington, D.C. 20540 July 1984）では、①普通のサイズの本を適切に配架するには（すべて本は、地の小口を下にして並べる）。②大きなサイズの本を適切に配架するには（通路に本の一部をとび出させないこと）。③普通のサイズの本を適切に棚に戻すには（背の上部に人差指をかけないで）。④普通のサイズの本を適切に棚に戻すには（空けたところに本を入れる）。⑤大きなサイズの本を適切に棚からとるには（両方の手で）。⑥大きなサイズの本を適切に棚に戻すには（両方の手で）。⑦本を移動するには（適切なブックトラックで）。⑧本を利用する（清潔な手で）。⑨複写（複写機のガラス部に本を押しつけない、など）、の9項目をあげています。そして図書館利用者や図書館職員が適切なハンドリングと保管をすれば「蔵書の命」は永らえると。

最近、話題になりませんが我々の仕事にとって基本です、考えてほしいですね。

受講生
司書

「礎を築く」

下地 萌美

始まった時は長い道のりだと感じた司書講習ですが、振り返ってみると、様々な科目と向き合っているうちに、あっという間に日々が過ぎていったように思います。この司書講習では、二か月間という限られた時間の中で、必要な科目を履修しなければなりません。一日の講義数も多いため、毎日新しい知識に出会い、吸収し、学んだことをもとに自分の考えを整理していくことの繰り返しでした。朝から夕方まで講義があり、自宅でも試験対策やレポート課題に取り組むという環境は、想像以上にハードで、最後まで乗り越えられるのか不安になることもありました。しかし、講義が進むにつれて、これまでの図書館の歩み、そしてこれから期待される図書館のあり方を、多面的に学ぶことができました。そして、今まで自分が認識していた図書館の使命や役割というのは、ほんの一部であるということに気付かされました。日本のみならず、世界各国の図書館の現状などを解説してくださる先生もいらっしゃり、視野を広げることができたのと同時に、この興味深い世界について学ぶことができる喜びを感じることもできました。

講義内ではグループワークや発表をする機会も多く、各々が自分の考えをしっかり持つこと、周囲とその考えを共有し、更に理解を深めていくことが求められました。意見交換をしたり、一緒に課題に取り組んだりするうちに、自然と他の受講生の皆さんと打ち解けることができたということは、講習を乗り越える上で非常に大きな支えとなりました。

この講習で学んだことや人との繋がりは、これから図書館で働いていく上で重要な土台になっていくと考えます。講習全体を通して、図書館の持つ可能性は際限なく広がっていると感じました。今回学んだことを基礎にして、今後も変化していく図書館のあり方について考え続けていければと思います。

最後に、わかりやすく講義を進めてくださった先生方、手続きなどのサポートをしてくださった職員の皆様、講習の日々を共に乗り越えた受講生の皆様、本当にありがとうございました。

受講生
司書

「サバイバル二〇一七 夏」

町田 明子

「へっ？今、呼ばれたか？」

頭痛で突っ伏していた、目録の試験一分前。何かしたかと試験に集中できず、恐々と事務室へ出頭すれば、講習の感想文を書けと!? ―その日から二週間、単位を落とす夢まで見つつ、課題に追われて寝不足続き。五限が七日間と、とっても素敵な日程が続く。

そして、やっとやっと、九月十六日(土)、この二か月間、よくぞ乗り切ったと自分を褒めちぎってはみたものの、過去にこの講習をこなした方々の精神力と体力には瞠目するばかり。

初日から図書館で課題と格闘する日々で、二十一時までの開館に感謝しながら、この調子で体力と気力がもつのかと立ちすくむ思い。学生時代、ここまで図書館に籠もっただろうか。それにしても、在学中、ここでアルバイトしていた縁で感想文が降ってこようとは…。体調には心掛けていたが、喉が痛み出した日が四科目めの試験。で、風邪は本格化。風邪が治まったら、今度は貧血や頭痛が試験直前ごとにお越しになった。そのうえ、椅子の硬さにめげて座布団を持参へ、あぁ、荷物が増える…。

パソコンスキルが不可欠の図書館ゆえに、パソコン初心者講習に参加。お蔭でグループの作業をパワーポイントにまとめることができて嬉しかった。「図書館情報資源特論」では、原物にあたる大切さや史料調査の際のマナーなどを学ぶなかで、デジタル化した図書館においても利用者と対面することの大切さに思いが至った。「情報資源組織演習」では、今まで〝謎〟であった分類や目録の規則性を勉強できてスッキリした。

在学中、司書資格を取得していたら今夏の苦行はなかっただろうが反面、司書に求められる知識やスキルを深く考えることもなかったろうと、しみじみ思う。また、同志がいたからこそ〝水泳する人〟(by 小田先生)とのお付き合いはほどほどにして、サバイバルできたのだと思う。ありがとうございました。

受講生
司書補

「夢に近づく夏」

布 つくし

受講前、1ヵ月半という期間は少し長いと思っていたのですが、充実した日々を送り、月日はあっという間に過ぎていきました。

私がこの講習を受講しようと思い始めたのは、今年の春頃でした。同じ職場に司書の資格を取得している方が居り、司書の仕事内容や図書館について話を聞いているうちに、司書を目指したいと思う様になりました。今まで、本に携わる仕事に就いたことが無かったので、授業について行けるかとても不安でしたが、先生方の授業は、どの科目も分かりやすく、こんな私でも理解することが出来ました。授業や課題、試験というもの自体が久しぶりで、初めの頃は環境に慣れず苦労しましたが、学生時代の感覚を思い出しながら、少しずつ馴染んでいくことができました。中でも課題が大変で、同じ期間に複数出題された時には、なかなか終わらず苦しい思いをしましたが、この講習で出会った皆さんと相談をし、励まし合いながら何とか課題を乗り切り、受講終了日まで辿り着くことが出来ました。知識を得るだけではなく、同じ目標を持つ素敵な仲間達にも出会うことができ、受講してよかったと心から思います。講習では、「図書館はサービス業である」という言葉から始まり、ただ貸出サービスをしているだけではなく、その地域ならではの図書館サービスを実施していたり、図書館をより多くの人々に知ってもらう為に、館内だけでなく外に出て発信活動をしていることを知り、今まで図書館に抱いていたものが大きく変わりました。今後、私も図書館の発展に少しでも貢献できるよう知識を増やし、また、利用者さんに相談しやすいと思ってもらえるような素敵な図書館員になれるよう、努力していきたいと思います。そして3年後、鶴見大学の司書講習を受講することを目標にこれからも、学んでいくつもりです。

私がこの夏で大きく成長できたのは、講師の先生方、クラスの仲間達、事務局の方々の温かいサポートのお蔭です。心より感謝申し上げます。生涯忘れることのできない素敵な日々は私の宝物です。本当にありがとうございました。

受講生
司書補

「勉強って楽しい！」

畑 奈緒香

思い起せば昨年の冬、受講を決意した時には、まさかこんなに意味深い夏になろうとは思いもしませんでした。以前から本も図書館もそこそこ好きだったのが急に図書館で働きたいと思い立ち、司書補講習ならば時間割的に仕事と両立出来そうだと軽く考えて応募。でも世の中そんなに甘くなかった！いざ講習が始まってみると、慣れない座学と文字を書くという行為に腰は痛くなるし指はタコだし。すさまじい情報量と内容の面白さに脳が興奮して寝つけない夜もありました。片道1時間半の通学路、毎日とにかく寝坊しないように、体調だけは崩さないようにと張り詰めておりましたが、最初の頃は一日の時間配分に苦心しました。やっと慣れてきた頃、「何故このタイミングで…」と思うような人生規模の問題が降ってきたり、ついでに前髪を切り過ぎたりして何が何だか毎日必死でした。

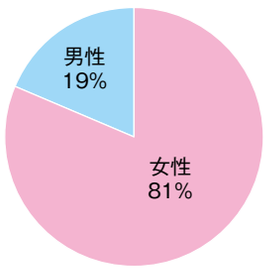
振り返れば自分で自分を追い込んでいた面もあるように思いますが、それでも絶対最後までやり切ろうという気持ちは揺るぎませんでした。それは、一緒に目標に向かって頑張っている仲間がいたからです。仲間と言っても全員と話した訳でもないのですが、同じ教室で講義を受けているだけで心強く、大変なのは自分だけじゃないと勇気を貰いました。年齢や職業、住んでいる所も皆様々で、グループワークや休み時間には色々な角度からの意見が聞けてとても興味深く、気付かされる事も多かったです。講習が終わりに近づき、多くの人と話せるようになるにつれ、このメンバーで良かったなあと思ったらちょっと寂しくなってしまいました。

また、こんなに勉強が楽しいと思えたのは、先生方のおかげでもあります。講義の内容が面白かったのは勿論ですが、先生が全員もれなく個性的でチャーミングで、仕事への愛情と誇りがストレートに伝わってきました。先生方の仕事に対する姿勢が、今の私の目標です。

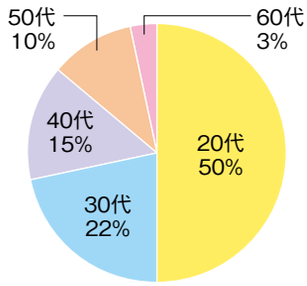
さあ、人生何度目かのスタートラインです。たくさんの出会いに感謝しながら、とりあえず3年後の司書講習目指して走り出したいと思います。ありがとうございました。

平成29年度司書講習 アンケート集計結果（回答数／受講数＝91名／124名）

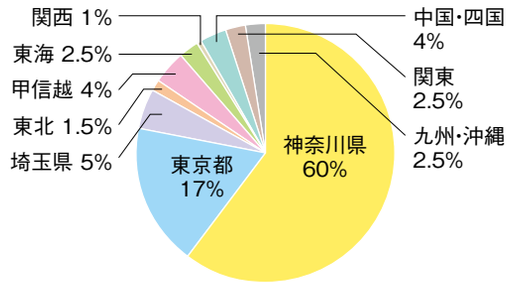
男女別データ



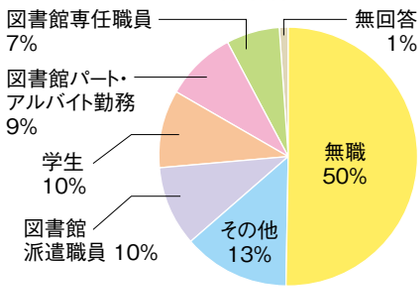
年齢別データ



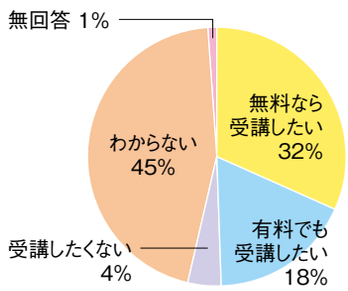
出身県別データ



職業別データ



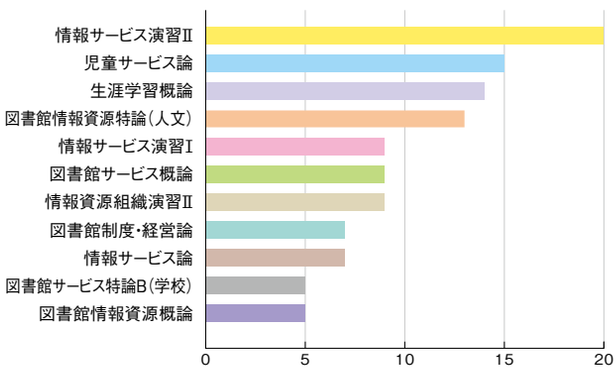
リカレント講座の受講について



【主な理由】

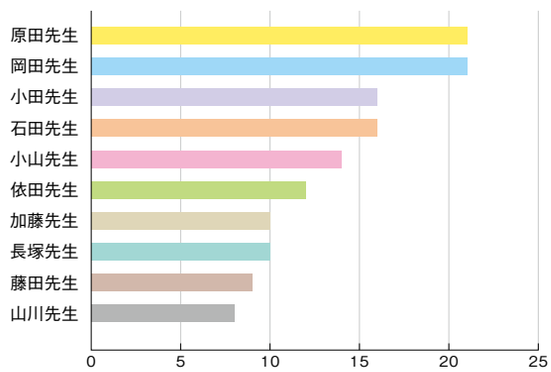
- ●無料なら受講したい…定期的に再学習したい。内容によっては、有料でも受講を希望したい。
- ●有料でも受講したい…非常に変化スピードが早いため、常に最新のことを知りたい。
- ●わからない…実際に司書職につけるかわからないので、就職ができたら受講してみたいです。

印象に残った科目（上位11科目／複数回答）



- ●情報サービス演習Ⅱ…パスファインダー作成やレファレンス回答等をつくったことがとても印象に残った。時間の調整が難しいところもあったが、課題にとりくんだことで、レファレンス回答の調査の仕方の流れを身につけることができたように思う。
- ●児童サービス論…読み聞かせやブックトークの実演や詩の朗読など参加型のスタイルが良かった。たくさんの絵本を知ることができて良かった。
- ●生涯学習概論…司書講習のはじめに開講され、その後の科目を理解していくのにとても役に立つ基盤となる知識を教えて頂けた。
- ●図書館情報資源特論（人文）…資料の修復や保存方法等興味深く、実際に古い資料（史料）に触れる事もでき、良い経験となった。授業のコマ数が少なくて残念だった。

印象に残った講師（上位10名／複数回答）



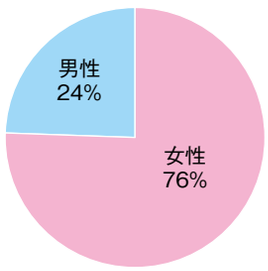
- ●原田先生…授業を受けている時はハードでしたが、後の科目で度々教えていただいた事が役に立ちました。
- ●岡田先生…野球やお酒、料理などの話をまじえながらの楽しい授業でした。図書館員にとって、大切なことは何なのか教えていただいた授業でした。
- ●小田先生…授業の内容よりも先生の印象の方が強かったです。先生は本当に図書館が好きなのだなというのが伝わってきました。
- ●石田先生…古文書の話、長崎での発掘の話、実際の古文書を見せていただいての話等々非常に興味をひかれた。そして先生の熱意が感じられ、疲れた体に元気をもらえた気がしました。楽しく受講できました。

感　想

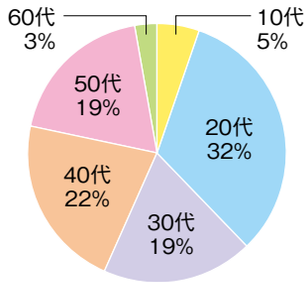
- ●慣れない図書館用語に悩まされながら、なんとか講習についていきました。毎週毎週、なにかしらテストやレポート提出などに追われる日々でとにかく大変でしたが、司書講習で出会った仲間に助けられて様々なことを頑張れたと思います。
- ●全ての教科が興味深く、先生方もすばらしい、楽しい先生ばかりで毎回の授業で新たな発見や気づきがあり、とても内容の濃い2ヶ月間でした。自分の周りの人にもぜひ勧めたいと感じました。
- ●OA研修室はモニターがあり、講師の方の説明が近くで見られて良かったです。
- ●遠方のため寮を使わせて頂きました。入寮当初、体調が悪くなった私に親身になって対応して頂いた事はとてもありがたかったです。寮が完備されている事で遠隔地者が受講できるシステムは素晴らしいと思います。
- ●PC初心者講習には数回しか参加できませんでしたが、わかり易い内容で勉強になりました。
- ●図書館は自習スペース、PCスペースが多くあり、すごしやすい雰囲気でした。貸出期間が1週間→2週間になれば活用しやすいのかなぁと思いました。
- ●2ヶ月という短い間でしたが有意義な時間でした。今までの実務に肉付けされていく感覚は非常に心地よく、実務に戻ったときにより高いパフォーマンスが発揮できそうです。

平成29年度司書補講習 アンケート集計結果（回答数／受講数=26名／37名）

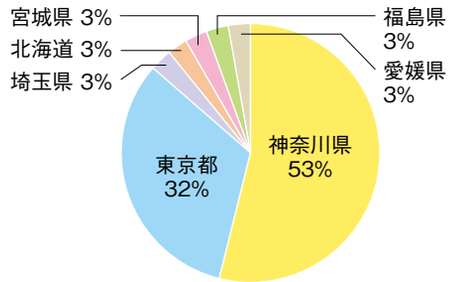
男女別データ



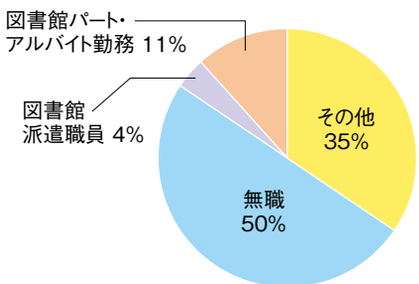
年齢別データ



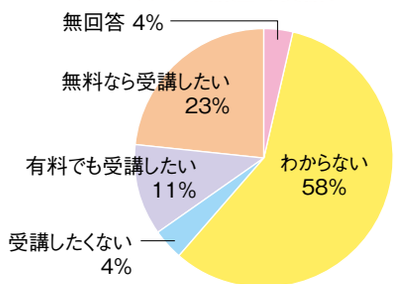
出身県別データ



職業別データ

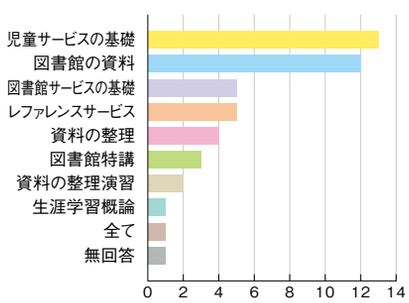


リカレント講座の受講について



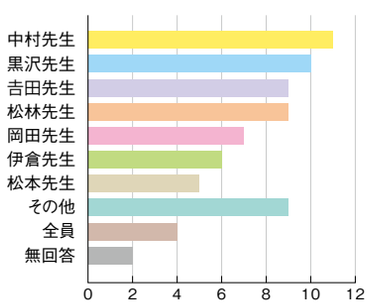
【主な理由】
- 無料なら受講したい…勉強したことに対する理解を深めたい。
- 有料でも受講したい…自分のスキルアップの為にも是非参加してみたいと思います。
- わからない…自分の今後の予定がハッキリしていないので。

印象に残った科目（複数回答）



- 児童サービスの基礎…絵本の話や、読み聞かせの話がとても面白かったです。今までそんなに興味がないものでしたが、授業を受けてとても興味を持ちました。
- 図書館の資料…古典籍を実際に手に取ることができ、今まであまり接することのなかった古典籍の世界を知ることができた。
- 図書館サービスの基礎…短い時間の中でこれでもかと言う位に色々な事を教えて頂きました。とても分かりやすく、実践でも役に立つことばかりであっという間に終わってしまった感じがして、名残惜しかったです。
- レファレンスサービス…質問に対する回答は多岐にわたる情報原からより正確な情報を根拠としなければならないと演習によって改めて実感しました。

印象に残った講師（複数回答）



- 中村先生…1つ1つの質問に丁寧に答えて下さり、いつも「大丈夫、大丈夫」とおっしゃり、心の中では「本当?」と思いながらも励まされていたと思います。
- 黒沢先生…先生の読み聞かせがすばらしく、読み手の力で本の魅力を印象深く伝えられるのだと感じました。
- 吉田先生…失礼ながらすごく怖そうな先生というのが第一印象でしたが、一人一人に対して親身に熱心に接して下さって嬉しかったです。
- 松林先生…とても授業が分かりやすくて良かったです。授業のスピードも早すぎず、遅すぎずで今回の講習で一番松林先生の授業が好きです。

感　想

- 図書館の求人を探して仕事に活かしていきたいです。ありがとうございました。
- どの講義も楽しく、図書館の役割を学ぶにあたりとてもためになる事ばかりでした。欲を言えば、もっと時間をかけて自分の身につけたいと思いました。
- 貴重な体験ができ、クラスの皆さんの助けも借りて受けられたことに感謝しています。
- 考えていたよりずっとハードでお休みの時も落ち着かない2ヶ月（1ヶ月半）でした。それでも目標はみんな一緒ということで周りの方々に助けて頂いたり、先生方にもいろいろな質問にこたえて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。
- この1ヶ月半、講師の先生方、事務局の皆様のおかげで何事もなく講習を終えることができました。とても楽しく充実した日々を過ごすことができ、講習を受けて良かったと心から思います。また3年後、鶴見大学で司書講習を受けられるように日々精進していきたいと思って居ります。
- 不安でいっぱいのまま始まった司書補講習でしたが、何とかー ヵ月半乗り切ることができました。毎日毎日勉強漬けで心が折れそうになったりもしましたが、終わってみればこれほど充実した日々を送れたということに満足感と嬉しい気持ちでいっぱいです。

▶司書・司書補講習の歩み

鶴見大学の司書・司書補講習は、昭和29年（1954）に開講しました。その間、著名な多くの先生方のご指導の下、優秀な修了生を輩出し、本学の講習は成長してまいりました。そして、開設時の昭和29年に講習生の会として「一夏会」が発足したのがこの会報の由来となっております。

平成9年には大学会館での講習がスタートし、JR鶴見駅から徒歩1分という恵まれた環境で講習を行うことができるようになりました。約60台のパソコンからなるOA研修室や80万冊にも及ぶ質の高い蔵書群を所蔵しコンピュータを駆使した高度な情報提供機能を持っている本学図書館の使用など、時代のニーズにふさわしい講習を行っております。

本学司書・司書補講習は、これらの歴史と数多くの優秀な修了生を誇りに今後ますますの発展を期して努力してまいります。

司書・司書補講習受講生の皆様へ

アンケートにご協力頂きましてありがとうございました。皆様のご意見を参考に、今後もより良い講習にしてゆきたいと思っております。また、この「一夏会報」を刊行するにあたり、原稿をご執筆いただきました先生並びに受講生の方々に深く感謝申し上げます。

真夏の暑い中、2ヶ月間お疲れさまでした。